

ポストコロナ時代を見据えた、 協同のあり方とは

2020年度、協同の発見誌は「『協同』を探究する」ことを1年間かけて行います。329号(4月号)は「生存の危機を超える、協同の総合戦略を探究する—未来への胎動から—」、330号(5月号)は「労働者協同組合運動から労働者協同組合法ができる」が特集タイトルですが、いずれも現代社会で「協同」をどのように考え、協同の思想・実践をどのように広げていくのかを「生命・生存の危機」(4月号)や「労働者協同組合法」(5月号)から考えました。その意味で本号は「コロナ禍」から協同のあり方を考えることをテーマにしています。

本号の特集は、大きく分けて2つの構成となっています。1つは協同をマクロな視点で捉え、協同の思想、協同組合、社会制度、連帯することなどを国内外問わずご執筆いただいた点です。もう一つはコロナ禍でも社会に必要な仕事としてのエッセンシャルワーカー(キーワーカー)であるワーカーズコープの方針と現場の実践の格闘を掲載している点です。

マクロ的な視点では、吉原毅さんと古村伸宏さんの対談は、本号の基調となっています。協同すること、協同組合の今後、地域や職場で連帯する視点、未来をつくる子ども・若者へのコミットのあり方等、多岐にわたる論点を出していただきました。

香川秀太さんは今までの西洋中心の科学・経済の考え方から、「協同と連帯の創造の交歓社会」を展望しています。協同での仕事おこしとコミュニティ形成の視点からワーカーズコープを「交歓社会のプロトタイプ」と位置づけ、新しい世界秩序を育てていく必要性を述べています。

海外からは、廣田裕之さん(スペイン)、カンネヨンさん(韓国)にお願いし、ポストコロナ時代に協同・連帯を促進する視点からご執筆いただきました。各国のコロナ情勢とその対応策だけではなく、住民・市民による連帯経済・社会経済を守り、再構築する上で必要なことを制度・協同組合・市民組織の視点から描いています。

これらの報告で共通することは、富めるものがより富める社会となっている資本主義経済の限界性ととも、市民・労働者の自治による「協同」「連帯」の地域づくり、社会づくり、制度づくりの必要性が述べられています。

もう一つはコロナ禍でのワーカーズコープの視点から協同を探究する視点です。

田中羊子さんの報告は、コロナ禍でのワーカーズコープを取り巻く情勢と今後の戦略・方針を捉える意味で本号のもう一つの基調となるものです。「いのちを守る共同体づくり」「最終判断は事務所の組合員が決める」等の現場の実践を紹介しています。大失業時代を迎える今こそ、持続可能な地域づくりと就労創出を結ぶ社会をつくるなど、コロナ禍でのワーカーズコープの社会的役割と今後の方向性を真正面から提起した内容だと感じています。

企業組合労協ながの長野中央病院現場では、地域でコロナ感染者を受け入れる病院の清掃を担うなか「今こそ、清掃班の出番だ」と自らの存在や仕事の意味や価値を仲間に鼓舞する姿がありました。感染リスクと闘いながら、コロナ感染を起こさない使命感を持って関わっている仲間の奮闘に胸を熱くなりました。

センター事業団富山地域福祉事業所では、デイ利用者から感染者が出たことで職員も濃厚接触者となり、自主的に休業しました。休業中、利用者に未来への展開を手紙として届け、生活の困りごとを聞き、利用者の生活状況をつぶさに把握しました。また危機のときだからこそ、改めて全組合員経営の大切さを痛感することになりました。個人的に手紙のやりとりは心を温かくさせるエピソードだと感じました。

センター事業団狭山地域福祉事業所は、コロナ禍で休館となるなかで、職員間での情報共有をLINE「水野美女軍団」の名前で共有するとともに、子育てに関わる情報をオンラインで発信しています。休館中に「何ができるのか」を仲間一人ひとりが考え、行動に移しています。このように自己回転する現場の原動力には、働く仲間同士が何でも話し合える関係性と利用者が何に困り、何を求めているのかの視点を持ち合わせていることがあると感じました。

センター事業団が運営する「いたばし生活仕事サポートセンター」では、コロナ禍で生活困窮者が増大していることを実感する報告です。新規相談件数は多い月で100件程度ですが、4月1,100件超、5月1,600件超と、11倍～16倍に跳ね上がっています。飲食店を中心に国の休業要請で仕事がなくなり、「家賃が払えない」等の相談が寄せられています。この事態は大失業時代を迎えたことを感じさせるとともに、コロナ禍で働き続ける、暮らし続けるためのセーフティネットの一助を担う仲間の奮闘に心打たれました。

これらの報告の共通点は、コロナ禍での働く仲間による全組合員経営の実践とよい仕事の探究、そして自らの仕事の社会的意味・価値を再確認する点です。

特集全体を通じて、ポストコロナ時代を見据えた協同のあり方とは、「人間の関係性を促進するEmpathy【エンパシー】(相手の立場に立って共感する)」の大切さを投げかけられたように感じました。ディスタンス化され、対面での人と人の関係性がより分断されたコロナ禍で、協同する職場・居場所などの社会をつくるのが今後の我々の責務だと思いました。

相良 孝雄(協同総合研究所 事務局長)